

女子ハンドボール競技におけるトップレベルのピヴォットプレーの特徴

—世界・日本・学生を対象にして—

伊藤 結衣(202111027、ハンドボールコーチング論)

指導教員：藤本 元、會田 宏、山田 永子

キーワード：記述的ゲームパフォーマンス分析、コンビネーションプレー、初動

【目的】

本研究では女子ハンドボール競技において技術的にスキルが高く、機敏で、スクリーン以外にも時折、空いているスペースに移動して得点しようとするピヴォットを対象とし、世界・日本・学生トップレベルのピヴォットプレーを比較することで、それぞれのレベルにおけるピヴォットプレーの特徴を明らかにすること、また今後競技を継続する本研究者の競技力向上に役立つ知見を得ることを目的とした。

【方法】

対象者は、世界レベル選手 Heidi Loke(以下、世界)、日本レベル選手 笠井 千香子(以下、日本)、学生レベル選手 伊藤 結衣(以下、学生)である。対象者がボールを保持したアタッカーに関与し、ディフェンダー(以下、DFE)に何らかの影響を与えていたピヴォットプレーの映像を収集し、記述的ゲームパフォーマンス分析を行なった。

分析項目は①プレーエリア、②DFE の対応、③初動(ボールを保持したアタッカーがプレーを始める前のピヴォットの動き)、④キャッチ時のプレー、⑤ボールを保持したアタッカーのパスの方法、⑥キャッチの方法、⑦キャッチ後のプレー、⑧ピヴォットのプレー結果、⑨ボールを保持したアタッカーのプレー結果とした。

分析項目とレベルとの関係を明らかにするために、カイ²乗検定と残差分析を行なった。

【結果と考察】

1. 初動とレベルとの関係

世界が学生に比べてジョイン(アタッカーが攻撃を始めようとするエリアに入っていく動き)が有意に多かった。日本は世界に比べて中継が有意に多く、ステイ(その場にとどまっている動き)が少なかった。世界は DFE の背後のスペースに積極的に移動することでコンビネーションプレーを始めている可能性があると考えられる。

2. キャッチの方法とレベルとの関係

学生が世界に比べて両手が有意に多かった。また、世界は日本と学生に比べて片手(利き手)が有意に多かった。さらに、世界は学生に比べて片手(非利き手)が有意に多かった。片手で、非利き手でもキャッチできることが世界レベルでプレーするために必要な技術であると考えられる。

3. キャッチ後のプレーとレベルとの関係

学生が世界に比べて利き手シュート体勢が有意に多かった。世界は日本と学生と比べて非利き手シュート体勢とピヴォットターンが有意に多かった。世界レベルにおいては、ピヴォットがボールをキャッチした後も、DFE に身体接触されながらプレーを妨害されるため、背後の DFE を振り切るためにピヴォットターンを使ったり、非利き手であってもシュート体勢を作ったりするようなプレーが必要であると考えられる。

【本研究者の課題】

- ・初動でジョインや中継を用いる。
- ・片手で、非利き手でもボールをキャッチする。
- ・ピヴォットターンを用いる。
- ・非利き手でもシュートを打つ。